

森鷗外『魚玄機』の史料とテーマについて

山 本 美 智 子

はじめに

大正四年七月、『中央公論』に掲載された森鷗外作『魚玄機』は、一般に、名譽欲、性欲を扱った作品として評価され、それ以上の研究がなされていないのが現状のようである。しかし、唐代一流の女流詩人が、嫉妬のために自分より数段も劣る婢と殺害したという、その内容をとつただけでも、鷗外の歴史小説の中にある、異色の存在であると言えるのではなからうか。また、『魚玄機』が脱稿された大正四年七月といえ、鷗外が陸軍退官の旨を上官大嶋健一に告げる五か月前、九月の『婦女通信』にそのうわさがのぼる二か月前である。鷗外の退官については、唐木順三氏を代表とする不満説と、平岡敏夫氏を代表とする順当説があるが、いずれにしても三十数年の陸軍生活を離れるにあたって、さまざまな思いを巡らしていたであろう鷗外の手によつて、この時

期に執筆された作品であることを考えれば、それが『魚玄機』を研究する上での大きな問題点であるとはいえよう。また、『魚玄機』には、その最後に参照文献が明示されているが、鷗外は、その全部を手にとつて読むことができたのであろうか。鷗外は、歴史小説を発表する時、『大鹽平八郎』のようにその典拠となる史料を明らかにする場合と、『寒山拾得』のように、自ら「一冊の参考書をも見ずに書いた」と言うごとく全く明記しない場合とがある。それにはそれぞれ何らかの理由があると思われるが、そのどちらの場合にも、典拠の処理が正しいか否かを疑つてみる必要はあろう。鷗外が知らずに、または故意に事実を歪めている可能性もあるからである。史料の書名を書き誤つたり書き落すこともあれば、実際には読んでいない史料を掲げることもあるのではなからうか。『魚玄機』の場合は、鷗外が明記した参照文献は全部で二十四種におよぶ。いつたい、これだけの数の史料を、鷗外は

全部読みえたか、また利用しえたのだろうか。これは、実際に史料を調べた上で作品との比較の中で解決されていく問題であろう。

また、『魚玄機』の史料は、魚玄機関係、温飛卿関係の二つに分けて掲げてある。魚玄機は作品の主人公であるが、その魚玄機より八種も多い十八種の参照文献を用いて描かれた温飛卿は、作品の中で、いつたいどのような位置を占めているのであろうか。その自己を主張する性格と不遇の生涯は、鷗外の心にどのように映っていたのであろうか。こうして、温飛卿の描き方にも問題点をみつけることができる。

唐代の美しい女流詩人が嫉妬のために殺人を犯すという事件そのもののおもしろさにかくされて、『魚玄機』にはこのような問題が含まれている。そこで、これらの問題を解決していくためには、まず、その典拠となる史料の検討から始めるのが妥当であろう。鷗外が、どのような史料によつて魚玄機や温飛卿を知り、それをどのような意図のもとにいかにかに作品へと形象化していったかを調べる作業の中で、これらの問題を解決する糸口が発見されていくと思われるからである。

そこで、このようなねらいのもとに、まず魚玄機関係の史料の検討から始めようと思う。

一 魚玄機に関する史料

『玄魚機』に明示された魚玄機に関する参照文献は次の十種である。

三水小牘

南部新書

太平廣記

北夢瑣言

續談助

唐才子傳

唐詩紀事

全唐詩（姓名下小傳）

全唐詩話

唐女郎魚玄機詩

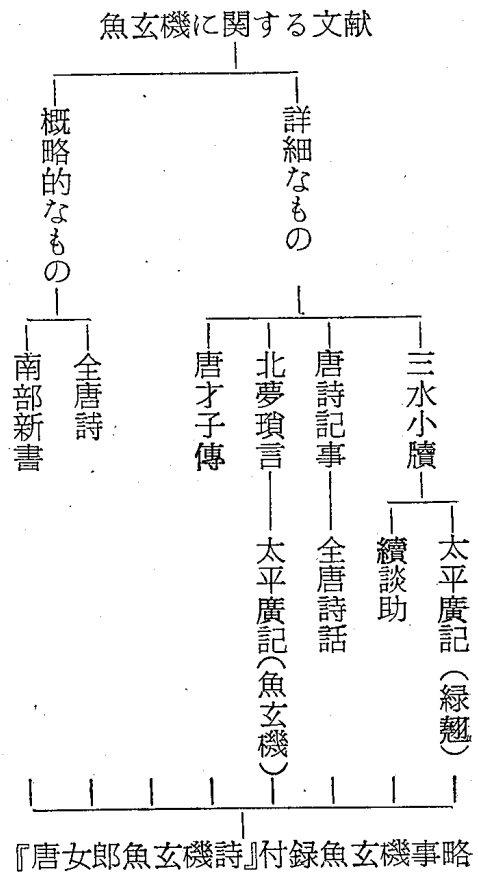
わざわざ書名を挙げて以上、鷗外がこれらすべての書物を利用したことは、十分考えられることである。そこで、鷗外の蔵書の一部が収められている鷗外文庫（現在、東京大学総合図書館に併合）を調べると、『全唐詩』『唐女郎魚玄機詩』の二部のみがみつかった。さらにその内容を調べると、『全唐詩』はごく概略的な伝記と詩歌のみであるが、『唐女郎魚玄機詩』の方には約五十首の詩の他に「付録魚玄機事略」として『太平廣記』をはじめとする九種の書物から魚玄機の伝記が引用されており、しかも、その書名をみるとすべて鷗外が参照文献として挙げたものであり、さらに掲載順序までが全く同じであることがわかる。このことから、鷗外はこの「付録」によつて参照文献を掲げ、執筆にあたつ

ではこの『唐女郎魚玄機詩』のみを利用した可能性がきわめて大であると言えよう。ところで『唐女郎魚玄機詩』といえば、その多くにはこの「付録」がついていない。『唐百家詩』『唐人五十家小集』（以上、内閣文庫蔵）『隨庵徐氏叢書』（東洋文庫蔵）に収められている『唐女郎魚玄機詩』はすべて魚玄機の詩歌のみであり、この葉德輝によつて編纂された「付録」のついているものは、士礼居蔵の宋本を清の道光元年に覆刻したもののみである。鷗外が手に入れたものには、たまたまその「付録」がついていたのであるが、鷗外文庫蔵の『唐女郎魚玄機詩』には表紙に「佐佐木信綱君将来」と墨で書かれており、また明治三十七年二月九日付の佐佐木信綱への書簡に、

御寵贈之詩集今日一讀仕候其附録ヲ見レバ作者ハ別品ニテ女道士兼藝者ト云フヤウナ人物ナルニソレガ又嫉妬デ別品ノ女中ヲ歐チ殺シ獄ニ下リタリトアリ實ニ芝居ニデモアリサウナ珍事ニテ面白ク存候

とあるように、明治三十七年二月以前に佐佐木信綱から贈られたもののようである。

さて、史料の検討を始める前に、各文献に明記された出典を調べると、次のように六種に分類できることが判明した。



つまり鷗外が参照としたすべての文献は、出典別に六系統に分類することができるのである。ところで、鷗外は『唐女郎魚玄機詩』一冊のみを利用した可能性がきわめて大であると書いたが、一方、各史料を実際手にとつて調べた可能性が全くないわけではないので、史料を検討するにあつては、各史料と『唐女郎魚玄機詩』の「付録」を並列して検討していこうと思う。

ではここに、史料検討の一例を示そう。

1 『三水小牘』、『續談助』

『太平廣記(緑翹)』系統

この系統のもとになっているものは『三水小牘』の「魚玄機答斲緑翹致戮」と題する一文であり、『太平廣記』の卷百三十、「報應」の二十九、「婢妾」の分類の中の「緑翹」と題する一文

に数か所の文字の異同を除いて全文引用されている。また、『續談助』では「三水小牘」と題する一文が「魚玄機答懿綠翹致戮」に相当するものであるが、かなりの部分がカットされている。なお、『唐女郎魚玄機詩』の「付録」には『太平廣記』と『續談助』のおのれの全文が引用されており、それらとその原典との異同はみられない。

次に『太平廣記（綠翹）』の全文を掲げる。

唐西京咸宜觀女道士、魚玄機、字幼微、長安里家女也。色既傾國、思乃入神。喜讀書屬文、尤致意于一吟一咏。破瓜之歲、志慕清虛、咸通初遂從冠幘、于咸宜而風月賞翫之佳句、往往播於士林。然惠蘭弱質、不能自持。復為豪俠所調、乃從游處焉。於是風流之士、爭修飾、以求狎或載酒詣之者、必鳴琴、賦詩問、以譴浪。惜字輩自視欠然。其詩有、綺陌春望遠、瑤徽秋興多。又、殷勤不得語、紅淚一雙流。又、焚香登玉壇、端簡禮金闕。又、雲情自鬱爭同夢、仙貌長芳又勝花。此數聯為絕矣。一女童、曰綠翹、亦明慧有、色。忽一日、機、為隣院所邀、將行誠、曰、無出。若有客、但云在其處。機、為女伴所留、迨暮方歸院。綠翹迎門曰、適某客來知、鍊師不在、不、舍轡而

去矣。客乃機素相昵者。意翹與之私、及夜張燈、乃命翹入臥內、訊之。翹曰、自執巾盟、數年、實自檢御、不令有似、是之過、致忤尊意。且某客至、款扉、翹隔闥、報云、鍊師不在。客無言、策馬而去。若云情愛、不蓄於胸襟、有年矣。幸鍊師、無疑。機、愈怒。裸而答、百數。但言無之。既委頓、請益水、酌地曰、鍊師欲求三清長生之道、而未、能忘解、佩薦枕之歡。反以沈猜、厚誣、貞正。翹今必斃於毒手矣。無天、則無所訴。若有誰能抑我、強魂誓不下、蠶於冥冥之中。縱爾淫佚。言訖、絕于地。機恐、乃坎後庭、瘞之。自謂、三人無知者。時咸通戊子春正月也。有問翹者、則曰、春雨霽、逃矣。客有下宴于機室者。因洩於後庭、當瘞上。見青蠅數十集於地、驅去復來、詳視之、一如有血痕、且腥。客既出、密語其僕、僕歸復語其兄、其兄為二府街卒、嘗求金于機、機不顧、卒深銜之。聞此遽至、觀門、覘伺。見偶語者、乃訝不、觀綠翹之出入。街卒、復呼、數卒、携鍾具、突入、玄機院、發之、而綠翹貌如生卒。遂錄、玄機、京兆府。吏詰之、辭伏。而朝士多為言者、府乃表列上。至秋、竟戮之。在獄中、亦有詩曰、易求無價寶、難得、有心郎。明月照幽隙、清風開短襟。此其

美者也。(出三水小牘)

傍線を付した所は鷗外の『魚玄機』と共通する箇所である。これをみればわかるように、鷗外は縁起殺害事件に関するほとんどの記述をこの系統から採っており、この事件に関する限り『魚玄機』の骨組はこの系統によつて成り立っていると言つてもよいだろう。また、○○を付した所は『續談助』では省略されている箇所であるが、傍線と○○印とが重なる部分がほとんどなく、鷗外は『三水小牘』や『太平廣記』の記述よりは、むしろ簡略化された『續談助』の方を利用したのであろう。また、××印1の「里家」(村や街の家の意)は『三水小牘』『續談助』では「倡家」(妓女のいる家の意)と、××印3の「街卒」(市街の掃除などをする人夫の意)は「衙卒」(官衙の最下級者の意)となつており、『魚玄機』の方も同様に「倡家」「衙卒」の方を採っている。また、××印2の「笞殺」は『魚玄機』では「扼殺」になつており、他の系統の史料もすべて「笞殺」あるいはただ「殺」(待婢)と記され、「扼殺」の記事はみられない。縁起の呪いの言葉と共に、凄惨な「笞殺」という言葉を無視した所に、魚玄機像を形作る上での鷗外の配慮がみられるようである。また、××印4は「贈隣女」と題する詩の一句である。この句は『三水小牘』系統、『唐詩記事』系統では獄に下つた後の作、『北夢瑣言』系統、

『唐才子傳』では咸宜観において李億を恨んでの作となつており、『魚玄機』のように咸宜観において仲間の女道士に贈つたという記事は史料の中には全くみられない。

2 魚玄機に関する史料のまとめ

史料検討の一例を『三水小牘』系統にとつて示したように、同系統の史料間の異同、また『唐女郎魚玄機詩』の「付録」とその原典との異同に注目した後、『魚玄機』記載事実と史料との相違に重点をおいて史料の検討をおこなつてみた結果を簡単に表にまとめると、次のような比較表となる。

岩波版全集	『魚玄機』記載事実	依拠史料
P三七(頁・八九(行))	玄機は咸宜観に住む女道士である	『三水小牘』系統 『唐詩紀事』系統 『北夢瑣言』系統 『唐才子傳』南部新書
P三七・二〇三	玄機は詩を善くした	『三水小牘』系統 『唐詩紀事』系統 『唐才子傳』南部新書
P三八六	玄機の詩が好事者の間に写し伝えられる	『三水小牘』系統
P三九二	玄機は倡家の出身である	『三水小牘』『續談助』

P 三九・二〇	玄機に詩を学ばせたのは 両親が将来「金のなる樹」 にしようとしたためであ る	フィクション B
P 三〇・九〇 P 三三・二	玄機と温とがはじめて対 面	フィクション A
P 三二・二〇三	「賦得江邊柳」の詩	『唐女郎魚玄機詩』
P 三三・三	温と玄機の間に詩筒の往 反があつた	『唐才子傳』
P 三四・二〇	玄機は李億の側室となつ た	『三水小牘』系統 『北夢瑣言』系統 『全唐詩』 『唐才子傳』
P 三四・二〇 P 三五・五	玄機の李億への反応は未 だ少女のものであつた	フィクション B
P 三五・六〇三	李億夫人の嫉妬のため玄 機は咸宜観へ	『唐才子傳』
P 三六・一〇九	玄機の詩名を求める念増 加	『唐才子傳』
P 三六・六〇七	「遊崇真觀南樓。觀新及 第題名處」の詩	『唐子郎魚玄機詩』 『唐才子傳』
P 三六・九〇 P 三七・六	玄機の性の目覚め	フィクション B

P 三七・七〇 P 三八・六	咸宜観における女道士采 蘋との仲	フィクション B
P 三七・九〇二	「贈隣女」の詩	『唐女郎魚玄機詩』
P 三八・七〇 P 三八・七	玄機の詩名の高まり	『三水小牘』系統
P 三九・八〇二	「寄飛卿」の詩	『唐女郎魚玄機詩』
P 四〇・四〇 P 四二・三	樂人陳某との出会い	フィクション A
P 四〇・九〇二	「感懷寄人」の詩	『唐女郎魚玄機詩』
P 四二・五〇六	玄機には緑翹という名の 婢がいた	『三水小牘』系統 『唐詩紀事』系統 『全唐詩』 『南部新書』
P 四三・五〇 P 四五・二	玄機の緑殺翹害の顛末	『三水小牘』系統
P 四五・二	玄機衛卒の訴えにより逮 捕	『三水小牘』 『續談助』
P 四六・一〇三	玄機の刑せられるのを惜 しむ声多数	『三水小牘』系統
P 四五・二〇 P 四六・五	京兆の尹温璋玄機を斬に 処す	『北夢瑣言』系統 『全唐詩』

(註) フィクション A は、史料をもとにそれを発展させることによって創作されたもの、またフィクション B は、史料にもとづかない全くの創作であることを示す。)

表をみると、『三水小牘』系統と『唐才子傳』が『魚玄機』を形作る軸となつてゐることがわかる。しかし、注目すべきことは史料の数の割にはフィクションが多いことである。ことに、フィクションBを中心とする、李億への少女らしい反応、女道士采蘋との同性愛、楽人陳某との恋愛とみていくと、そこには、史料の間に別個の創作をはさんだというよりは、玄機が女として性に目覚める過程を一貫して描く、という創作態度がみられる。ここに『魚玄機』を説明する一つの鍵が見出せるようである。

二 魚玄機とらいてう

明治四十四年九月『青鞥』を発売、その創刊の辞「元始女性は太陽であつた」で当時の社会に大きな反響を呼んだらいてうこと平塚明子^{はら}は、森田草平、尾竹紅吉、そして夫となつた奥村博史との恋愛においてもまた世間をさわがしたといえよう。第一の恋愛となつた森田草平との塩原雪の彷徨事件（明治四十一年）は、二人の心理状態が世間に理解されないまま、教養ある二人がおこした愚かな心中未遂事件ということでは有名になり、しかもそれを草平が『煤煙』という新聞小説にしたため、いつそう世間の関心をひく結果となつた。この小説で最も話題になつたのは、主人公小島要吉が女主人公真鍋朋子の前にひざまづき、この女性の力によ

つて悲しいデカダンの生活から救われようとする場面で、朋子が「どうか、もつとどうかして」と身悶える言葉であつた。このことについて後に草平は「もし彼女にして、ただ性の欲求からそんな事を口走つたのだとすれば、同時に身を悶えて泣く必要なぞありはしない^{（註1）}」と書いている。ともかく、この恋愛は、通常でいう恋愛とは異なつていた。当時の草平は、ダナンチオの『死の勝利』に感動し、むしろ憑かれた状態にあつたため、らいてうとの運命をこの作品の主人公たちのそれに擬したがつていたようで、意識的にまたは無意識的に二人の仲をこの小説の示唆する線に沿つて進めていこうとしていた。^{（註2）}一方、らいてうも二年前からの参禪で見性し、生命の充実感にあふれ、のびのびと生きていた時であり、見性後の悟りと好奇心から草平をみていた。このように互いに自己の精神の満足だけを求め、また互いに自己の優位を守つて行動していた二人が、草平の「……わたくしはあなたなら殺せると思う、殺すよりはか、あなたを愛する道がないから。」という手紙だけで結ばれて塩原へ行つたものの、「僕は意気地のない人間なのだ（中略）あなたなら殺せるかと思つたけれど、だめだ」という草平の言葉で二人の心は離れ、結局、生田長江らに連れもどされ、この恋愛事件は終わつたのであつた。

第二の尾竹紅吉との仲は、明治四十五年、紅吉が青鞥社を訪れ

た時から奥村博史が出現するまでの約二年間である。紅吉は、その初対面からすでにらいてうに魅了されており、またらいてうも「生まれながらに解放された人間といった感じで眺めていて快いほどのもの」と、好感をもつていた。紅吉の出現は青鞥社にうずくような欲望と輝く未来の色彩を投入したものであつたが、五色の酒事件や吉原遊興事件をおこし、紅吉に対する社内非難が高まつたことと、その騒ぎの中で肺結核の療養にむかつた茅ヶ崎での奥村博史の出現で、らいてうの関心が自分にむかなくなつたことから、紅吉が青鞥を退社したのは大正元年十一月のことであつた。しかし、青鞥時代の紅吉はらいてうの目を自分にむけさせることに必死であつた。このことは『青鞥』二巻七号の「編集室より」の「もし事実逐吾博士に限らずその他の人が今らいてうと結婚するなんて事になつたらさしあたり第一番に自殺する奴がどこか、らいてうの目につく処にある筈だ。」「紅吉はらいてうの事を『唯た一人』つて呼んでらいてうによつて生きて行つてゐるそうだ。」「などという紅吉自身の手による記事からもうかがえる。また一方、らいてうも『青鞥』二巻八号の「円窓より『茅ヶ崎へ茅ヶ崎へ』」で「紅吉を自分の世界の中なるものにしようとした私の抱擁と接吻がいかに烈しかったか、私は知らぬ。」「私の少年よ。らいてうの少年よ。」と紅吉に対する気持を表わしている。

このように、らいてう・紅吉の二人の関係は『青鞥』誌上において公けであつたが、その二年後の『青鞥』四巻四号の「女性間の同性恋愛」と題する付録の前書きにおいてらいてうは、紅吉の異常な嫉妬に悩まされたと述べて、かつての紅吉への気持を否定した。

第三の奥村博史との恋愛は、大正元年夏、尾竹紅吉の療養先茅ヶ崎で始まつたが、紅吉の嫉妬と博史の友人新妻莞の嫉妬という二つの圧力によつて一時とだえたものの、『青鞥』三巻九号の「手紙の中から」で「二人の愛に対しては何人の干渉も絶対に許しません。どんな障碍もきつと征服します」と言いきつたらいてうの言葉によつて公然のものとなり、大正三年一月には、二人で共同生活を始めるに至つた。しかし、新しい女と騒がれたらいてうの、五歳も年下の画学生との恋愛、そして恋愛からはいつた自由結婚は世間の非難をさらに烈しいものにしたのであつた。

以上、明治四十五年から大正四年までの世間の注目をあびたらいてう平塚明子^{はるこ}の三つの恋愛の経緯をみてきたが、ここで、鷗外の『魚玄機』における玄機の恋愛とらいてうのそれとが微妙に一致していることに気づかなければならない。その類似描写を『魚玄機』からぬきだすと、魚玄機と李億における

李が身を以て、近かうとすれば、玄機は回避して、強ひて逼れば号泣するのである。(中略)李は玄機が不具ではないかと疑つて見た。しかし若しさうなら、初に聘を卻けた筈である。李は玄機に嫌はれてゐると思ふことが出来ない。玄機は泣く時に、一旦避けた身を李に寄せ掛けてさも苦痛に堪へぬらしく泣くのである。

は、らいてうと森田草平に類似し、玄機と采蘋における

采蘋は(中略)軽率であつた。(中略)玄機よりは少いので、始終沈重な玄機に制馭せられてゐた。そして二人で争ふと、いつも采蘋が負けて泣いた。

の采蘋は紅吉に似ており、また、玄機と陳某における

体格が雄偉で、面貌の柔和な少年で、多く語らずに、始終微笑を帯びて玄機の挙止を凝視してゐた。年は玄機より少いのである。

は、奥村博史に似ている。この三つの類似は、らいてうの恋愛と玄機のそれとの微妙な関係を示唆しているといつてもよいのではなからうか。さらに、これを裏づけるように斎藤茂吉が「鷗外の歴史小説」(註4)の中で『魚玄機』について述べている。茂吉は、魚玄機が咸宜観で「忽然悟入する所があつた」という箇所について

丁度そのころ、平塚明子さんが、花のやうな処女時代を通過

して、忽然として悟入した感覚のことを自分の文章で告白してゐた。性欲學に於て飽和するほどの智識のあつた鷗外が、直ちにその告白に飛びついたのは極めて自然なことである。

と、魚玄機の性の目覚めはすなわちらいてうのそれであり、鷗外はらいてうの文章に啓発されて『魚玄機』を執筆したのだと指摘している。茂吉の指摘に該当するらいてうの告白は『青鞥』五巻

二号(大正四年二月)の「小倉清三郎氏に——『性的生活と婦人問題』を読んで」であろうと推察できる。この文章の中でらいてうは「私一個の経験と言つても恋愛を経験してから所謂慾情と名づけるものの自分自身の中に表れてくる迄に五六年もかゝつて居ります。(中略)そして今私は自分の恋愛の中から春的な慾望の生じてきたことを知つてゐます。」と言つてゐる。この文章を書いた当時のらいてうは、奥村博史との共同生活を始めて一年、またエレン・ケイから婦人の性の重要性を学んだ直後であり、小倉清三郎のまじめな性への取組み方に興味を持ち、また小倉から知識を得ることが多かつたようである。(註5)

このように魚玄機とらいてうとは無関係ではないように思われるが、茂吉の推論に加えて、さらに、らいてうと魚玄機との結びつきを裏づけるのに、鷗外のらいてうへの関心がある。鷗外は「与謝野晶子さんに就いて」(註6)の中で、

序だが、晶子さんと並べ称することが出来るかと思ふのは、平塚明子さんだけだ。詩の領分の作品は無いらしいが、らいてうの名で青鞥に書いてゐる批評を見るに、男の批評家にはあの位明快な筆で哲学上の事を書く人が一人も無い。

と、らいてうをはめたたえている。と同時に、鷗外が『青鞥』を読んでいた事実が明らかにされている。『青鞥』は、鷗外夫人しげ女が青鞥社の賛助会員であつたことから、毎号鷗外のもとに届けられていたらしく、またしげ女と青鞥社の間が切れた後も『スバル』や『三田文学』と毎号交換広告をしていたため、自然鷗外の目の届く所にあつたものと思われる。^(註7) また、森田草平の『煤煙』を単行本にするにあたり「『煤煙』の序に代ふる対話」として「影と形」という戯曲を鷗外は書いており、らいてうの告白以前から鷗外のらいてうへの関心があつたことを推量することができる。さらに、茂吉の指摘する鷗外の性欲学における飽和するほどの知識とは、明治二十二年、ドイツから帰朝した翌年から約十五年にわたり『東京医事新誌』『衛生新誌』『公衆医事』に発表した性科学の論文をさしていると思われる。このように、茂吉の推論はすべて根拠のあるもので、その推論が適中している可能性の極めて高いことを示している。

以上のような裏づけから、らいてうと魚玄機との恋愛における

類似は、らいてうの告白に啓発された鷗外が魚玄機という歴史上の人物をかりてらいてうの性の目覚めの過程を映した結果とみてよいであろう。と同時に、鷗外の『魚玄機』執筆動機ならびにテーマの一部は、ここにおいて明らかになつたといえよう。

註1 森田草平『続夏目漱石』(昭和十八年、甲鳥書林)

2 平塚らいてう『元始、女性は大陽であつた』(昭和四十六年、大月書店)。以後のらいてうと森田草平、尾竹紅吉、奥村博史との恋愛における事実は、すべて同書による。

3 富本一枝『青春懺悔、痛恨の民』(昭和十年二月『婦人公論』)

4 斎藤茨吉『鷗外の歴史小説』(昭和十一年六月『文学』)

6 平塚らいてう『元始、女性は大陽であつた』。また、らいてう「読んだものの評と最近の雑感」(大正三年六月『青鞥』四巻五号)、小倉清三郎「性的生活と婦人問題」(大正三年十二月『青鞥』四巻十一号)、らいてう「小倉清三郎氏に」(大正四年二月『青鞥』五巻二号)、というように、らいてうと小倉清三郎による男女間の性のとらえ方の違いについて論争がある。

6 森鷗外「与謝野晶子さんに就いて」(明治四十五年六月『中央公論』)

7 平塚らいてう「鷗外先生について」(昭和三十七年『文学散歩』)
平塚らいてう「鷗外夫妻と青鞥」(昭和三十七年八月『文芸』)

三 温飛卿に関する史料

鷗外が温飛卿に関する参照文献として挙げたのは、次の十八種の漢籍である。

舊唐書

漁隱叢話

新唐書

北夢瑣言

全唐詩話

桐薪

唐詩紀事

玉泉子

六一詩話

南部新書

滄浪詩話

握蘭集

彦周詩話

金筌集

三山老人語錄

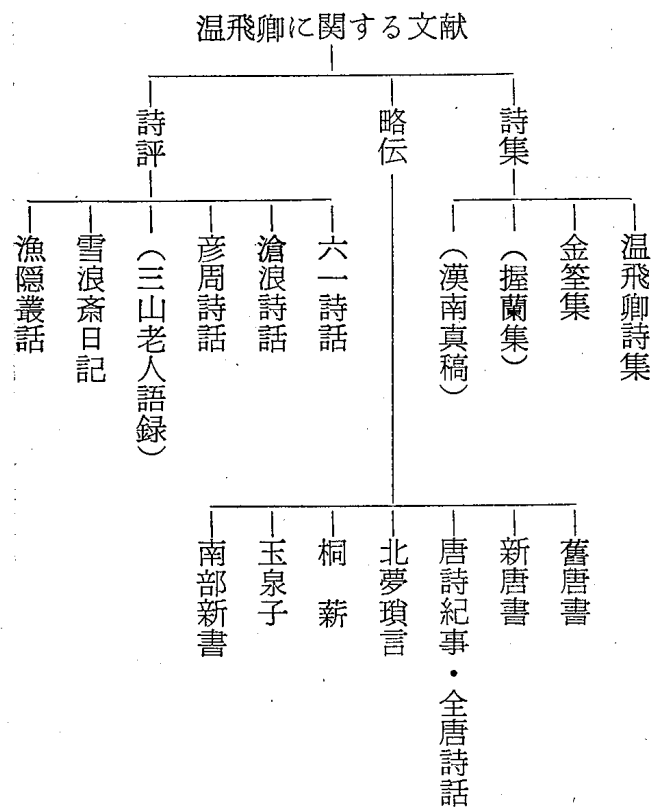
漢南真稿

雪浪齋日記

溫飛卿詩集

これを、魚玄機の史料の時と同様、鷗外文庫でその存否を調べると、『溫飛卿詩集箋注』がみつかった。これは鷗外が挙げた『溫飛卿詩集』とは別本で、これに注釈が加わったものであるが、「鷗外蔵書」の押印があるところから鷗外が利用したとみてよいだろう。そこで『溫飛卿詩集箋注』をみると、溫飛卿の詩以外に「舊唐書本傳」として溫の略伝を挙げ、その後に「付録諸家詩評」として『全唐詩話』以下『南部新書』まで十二種の書物から抜萃した記事が載っている。この書名をみていくと、魚玄機の場合と同様、『舊唐書』以下『全唐詩話』から『南部新書』まで鷗外が参照として挙げた書名とその掲載順序が一致していることがわかる。なお『新唐書』は『舊唐書』の中に「新書」として挿入されており、また鷗外が参照としてあげた『握蘭集』『金筌集』『漢南真稿』の名も、その『新唐書』の抜萃の中にあらわれてい

る。つまり、鷗外が参照として挙げた文献はすべて『溫飛卿詩集箋注』の中に出ており、しかもその掲載順序も『舊唐書』以下『南部新書』までの十四種が全く同じであることから、魚玄機の場合と同様、鷗外は『溫飛卿詩集箋注』一冊のみを利用したのではないかと思われる。なお『溫飛卿詩集』をみると溫に関する略伝などの付録はないところから、鷗外は『溫飛卿詩集』ではなく『溫飛卿詩集箋注』の方を使用したと思われる。そこで溫飛卿の場合も『溫飛卿詩集箋注』を参考にしながら史料を検討していこうと思う。



(註 (一) を付したものはその所在が不明であることを示す。)

ところで、温飛卿の場合は魚玄機の時とは異なり出典別の史料分類はできないが、そのジャンルにより右のように大きく三つに分類することができた。

このうち詩集と詩評に分類されたものは純粋に詩と詩風についてだけ書かれており、『魚玄機』の構成にはほとんど関係ないと思われるところから、検討するには及ばないとして、残りの七種の史料についてのみ検討してみた。検討の方法は、魚玄機の場合と同様、『温飛卿詩集箋注』とその原典との異同、『魚玄機』記載事実と史料との相違に重点をおいておこなったので、ここではその結果のみを比較表にして示す。

岩波版全集		『魚玄機』記載事実	依拠史料
P 三九(頁)・ 四〇八(行)	温、斐誠・令狐滈らと遊興		
P 三九・九〇	温には詩賦の才があつた	『舊唐書』『新唐書』『全唐詩話』『北夢瑣言』『唐詩紀事』	
P 三九・三〇三	温の琴笛の才	『桐薪』	
P 三八〇・三	温八叉と号された	『全唐詩話』『唐詩紀事』『北夢瑣言』	

P 三八〇・二〜四	温鍾馗と呼ばれた	『桐 薪』
P 三八〇・四〜五	李商隱と並び称された	『新唐書』
P 三八二・四〜七	温、進士の試験に応ずる詩才はあつたが第せず	『舊唐書』『新唐書』
P 三八二・四〜六	温、拳場で他人の詩作に手をかす	『新唐書』『全唐詩話』『北夢瑣言』『唐詩紀事』
P 三八二・八〜三	令狐綯が故事をきいたのに対して温は「僻書に非ず」と答え政事のいとまに読書でもするようにと皮肉を言う…(1)	『唐詩紀事』『南部新書』
P 三八三・二〜三	温は令狐綯のために、菩薩蠻の詞を代作するがそれを他言する…(2)	『全唐詩話』『北夢瑣言』『唐詩紀事』
P 三八三・二〜三	温、令狐綯の無学を諷る…(3)	『全唐詩話』『北夢瑣言』『唐詩紀事』
P 三八三・四〜五	温、宣宗の「金步搖」に「玉條脱」をもつて対句せしめ激賞される	『全唐詩話』『北夢瑣言』『唐詩紀事』『南部新書』
P 三八三・五〜七	温、旗亭で宣宗と会うが顔を知らぬため、目前で無礼の言をなす…(4)	『全唐詩話』『北夢瑣言』『唐詩紀事』『南部新書』

P 三三八〇	沈詢が知拳となり温のため拳場に別席を設けさせた	『唐詩紀事』 『北夢瑣言』
P 三三九	令狐綯は温の才能を認めながらも遠ざけた	『唐詩紀事』
P 三三九〇	趙顥の妻である温の姉は弟のため要路に懇請したがむだであつた	『玉泉子』
P 三三二	温の友人に李億という人物がいた	『温飛卿詩集』
P 三四一	温は襄陽で徐商の下で働くが後失意してやめる	『舊唐書』 『新唐書』 『唐詩紀事』
P 三六八 P 三六三	温は、令狐綯が自分を信用しないのを恨み、ある夜妓院で虞候にうたれたのを訴える。徐商はこれをたすけたが、楊収のために温は左遷される…(5)	『舊唐書』 『新唐書』
P 三七一	温、方城の尉となる	『舊唐書』 『全唐詩話』 『北夢瑣言』 『唐詩紀事』
P 三七二〇	左遷される時、温は孔子の教えをもつて誠められる…(6)	『全唐詩話』 『唐詩紀事』 『北夢瑣言』

P 三七三	温、後、隋県で死亡	『舊唐書』
P 三七三〇五	温の子の名は憲、弟は庭皓。弟は龐勛の乱に殺害された	『舊唐書』

表をみると『舊唐書』と『全唐詩話』（『唐詩紀事』『北夢瑣言』は同文）から採られた記事が多いことがわかる。また、温飛卿の言動や性格がすべて史料に拠っている点は、魚玄機には一貫して創作の手が加えられていたことと考えあわせて注目すべきである。鷗外は、温飛卿の参照文献十八種の中で、略伝を記してある八種の史料のみによつて温飛卿という人物を形作つたようである。ここに鷗外の温飛卿という人物への関心の高さがあらわれているといつてもよいのではなからうか。と同時に『魚玄機』に温飛卿という人物を配した鷗外の心境をもうかがい知ることができるようである。

四 鷗外と温飛卿

『魚玄機』が執筆された大正四年当時、鷗外はいつたほどのよきな心境にあつたのだろうか。それを執筆前後の日記および創作から推察してみよう。

鷗外の大正四年五月の日記には、

三日 主上岡大臣をして勅命を伝へしめ給ふ。詩を献ぜよ

となり。

十五日 応制の詩を書して献じまつる。

とあり、『魚玄機』執筆の二か月前には応制の詩献上という重要な出来事があつたことを示している。この時の勅命を受けて無上の光栄と考えている鷗外の気持は、友人賀古鶴所にあてた五月十九日付書簡の中によくあらわれている。ところで、この書簡には勅命をうけ「ソコデ久振ニ詩ヲ作り」というくだりがある。この字句に注目してみると、応制の詩献上の頃は漢詩の創作はあまりおこなわれていなかったようである。しかし応制の詩献上を契機としてそれ以後は漢詩への関心が高まつたのであろう、六月四日の日記には「文求堂に往きて温飛卿集を買ふ。」とあり『魚玄機』執筆の動きがみられ、そして七月七日には「魚玄機を舁し畢る。」とある。このような漢詩への関心の中で、鷗外は、七月十八日には「韶齋」と題する詩を作る。

韶齋

韶齋期為天下奇。其如路遠半途疲。

三年海外経程雪。両度軍中免革履。

醉裏放言逢客怒。緒余小技見人嗤。

老来殊覺官情薄。題柱回頭彼一時。

この詩の中の「老来殊覺官情薄」の一句には鷗外の官情への不満があふれている。この不満は、唐木順三の「我々は何か氣まづい衝突が省内にあつたことだけは察し得るのである」^(註1)という言葉のように直接的な原因があつたものか、また山田弘倫の「先生の眼中には一部の軍人を除いて、軍部の人には大体重きを置くほどの人物はなく、又軍部の人からは、先生は学者ではあるが、自然主義者、軟文学者で一向役にも立たぬ事ばかり書いてゐるとのみ考へられてをり」^(註2)の言葉に代表されるような陸軍在籍三十年の鬱積した不満なのかを判断しがたいが、大正四年七月に鷗外がこのような心境にあつたことだけは事実とすることができよう。

さて、『魚玄機』執筆当時の鷗外的心情を確かめた今、もう一度、温飛卿を中心として『魚玄機』を見直してみよう。温飛卿関係の史料検討の結果、温飛卿には創作の手が加わっていないことが明らかにしたが、それでは温飛卿像はどのような傾向の史料によつて形作られているのだろうか。温飛卿関係の史料との比較表を見直してみると、比較表に(1)から(6)までの番号をつけた挿話には温飛卿の自己を主張する性格と官情への反発の姿勢がみられる。ことに(1)(2)(3)(6)の挿話は、前述の山田弘倫の言葉に通じる鷗

外の不満と実によく対応している。もしこの対応が故意のものであるとすれば、鷗外は官情への不満を『魚玄機』において温飛卿に代弁させているといえよう。ところが、この温飛卿の言動は創作ではなくすべて史料に基づくものである。このようにみえてくると、たとえ鷗外には温飛卿に官情への不満を代弁させる意図がなかったとしても、鷗外の温飛卿に対するなみなならぬ共感が存在したことだけはうかがうことができる。

こうして、『魚玄機』における温飛卿は構成上必要欠くべからざる人物とは思われないが、その温飛卿を『魚玄機』に登場させた鷗外の心情は十分推量することができる。温飛卿の不遇の一生、官情への反発の姿勢に鷗外は深い同情と共感を覚え、意識的にあるいは無意識的に『魚玄機』における温飛卿像を作つていつたのではないかと思われる。

註1 唐木順三『鷗外の精神』（昭和二十三年、筑摩書房）

2 山田弘倫『軍医森鷗外』（昭和十八年、文松堂書店）

結 び

これまで魚玄機関係、温飛卿関係の史料を別々に検討し、またその結果から『魚玄機』のテーマ、執筆動機を推論してきた。ここで、史料を全体としてまとめ、また『魚玄機』全体を検討して

みようと思う。史料においては、魚玄機・温飛卿の結びつき、二十四種におよぶ史料の意味、史料の形象化の特徴などを総合的にみよう。また『魚玄機』を全体的に検討し、成立への過程を調べることによつて鷗外の執筆動機、また『魚玄機』のテーマを明らかにしよう。

1 史料のまとめ

これまで魚玄機と温飛卿の史料を別々に検討してきたが、兩人のかかわりあいがある史料ではどのような点で、まず明らかにしよう。魚玄機の史料には、「與^ニ温庭筠^ニ交遊^有」相^ニ寄^{スルコト} 篇^ニ什^ニ」（『唐才子傳』）とあり、また玄機の詩に「冬夜、寄^ス温飛卿^ニ」「寄^ス飛卿^ニ」の二首があることから交遊関係を知らることができるが、温飛卿の方には何ら手がかりがない。ただ温飛卿の「送^ル李億^ノ東歸^ニ」の詩から温と李億の間に交友関係があったことがわかる。つまり、李億を通して温と玄機はつながっていることになる。しかし、鷗外の書いたように、温が李億と玄機を結びつけたものか、李億の側室となつた玄機が李億の友人として温を知ようになったのかは、史料からは判断しかねるところである。ともかく、玄機と温との結びつきは魚玄機関係の史料にのみ見られることが明らかになった。

次に、鷗外は魚玄機と温飛卿の年齢をどのようにして設定したかを調べよう。『歴史其儘と歴史離れ』で「時代を蔑にしたくないから、わたくしは物語の年代を^{とど}した」と書いている以上、鷗外

は理にかなった時代設定をしていると思われる。次に『魚玄機』における時間設定と史料に記載されたそれとの比較表を掲げる。

西暦					年号					通説年令		『魚玄機』記載事実	史料記載事実		
866	861			860	859	857	850		847	大中	温飛卿			魚玄機	
7	2	2	1	1	13	11	4	1	1	36才	5才				
55				49		46									
24		19		18		15									
・温、流離して揚州に					・春、温、襄陽から長安に帰る ・玄機、十八歳で李億の側室となる ・玄機、咸宜観で忽然悟入する ・玄機十九歳で采蘋と親しむ					・温三十歳で始めて進士の試に応ず ・玄機五歳 ・令狐綯、宰相となる ・温四十歳、玄機十五歳で始めて対面する ・令狐綯、宰相をやめる					
↑咸通初、玄機、破瓜歳（十六歳）、咸宜観に入る（三水小牘） ・咸通中、玄機、李億の妻となるも愛衰えて咸宜観の女道士となる（北夢瑣言） ・咸通中、玄機、及笄（十五歳）、李億の側室となるも夫人の嫉妬のため咸宜観に入る（唐才子傳）					・大中末、温、試験に応ず（新唐書）					↑大中初、温、進士に応ず（舊唐書）					

874	868				
乾符 1	14	9	9	9	9
	57				
	26				
	<ul style="list-style-type: none"> ・晩春、玄機二十六歳、緑翹を殺害する ・初夏、玄機の殺人発覚 ・立秋の頃、玄機二十六歳、温璋により刑せられる ・冬、飛卿の弟庭皓、の龐助乱で殺害される 				
	<ul style="list-style-type: none"> ↑咸通中、玄機、咸宜觀の女道士（唐詩紀事） ・咸通中、温、襄陽から帰る（舊唐書） ↑咸通戊子（九年）春、玄機、緑翹を殺害。秋、玄機、戮される（三水小牘） ・？、玄機、温璋により刑せられる（北夢瑣言） ↑咸通中、温庭皓、龐助の乱で殺される（舊唐書） 				

（註 ↑印は『魚玄機』記載事実と史料とが呼応することを示す。また「通説年歳」は岩波中国詩人選集『唐詩概説』所収年表（『全唐詩人年表』徐倬編に拠る）

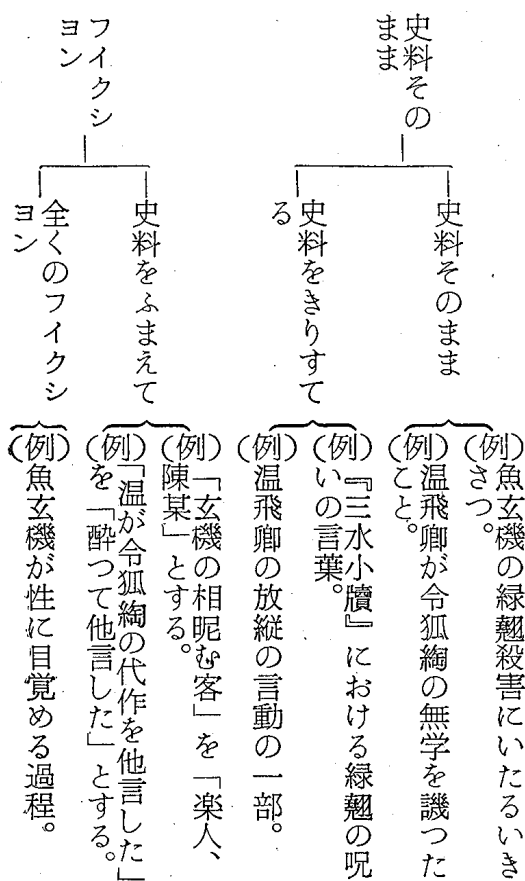
表でわかるように、魚玄機の年齢は通説と鷗外の設定とが一致しており、年齢設定に関するかぎり鷗外は史料を利用してはいないようである。これは、史料は「咸通初」「咸通中」などあいまいな記述であり、しかも各史料により年齢が前後するなど年齢設定の決め手にはならないからであろう。また、温は史料に年齢を示すものがないためか、鷗外は温飛卿の年齢を通説よりやや若く設定している。ところで、大正四年当時、魚玄機・温飛卿の通説年齢がいかにかに定められていたかは不明であるから、ここでは鷗外が年齢設定に関しては史料の細かい制約をうけなかったとだけ結論づけておこう。次に、鷗外が実際に利用した参照文献について

明らかにしようと思う。鷗外は、『魚玄機』の参照文献として計二十四部の書物を挙げた。しかし、実際には魚玄機については「付録魚玄機事略」のついた『唐女郎魚玄機詩』一冊、温飛卿についても『温飛卿詩集箋注』一冊だけを利用したのではないか、という疑問があつた。今、史料を検討し終わつた時点でやはり鷗外はそれぞれ一典の史料しか利用しなかつた可能性がきわめて大であると言える。その論拠となるのは史料の存否である。現在の日本でその漢籍の蔵書量を誇る内閣文庫、京都大学人文科学研究所、東洋文庫、静嘉堂文庫、宮内庁書陵部の五図書館の目録で二十四部の存否を調べてみた結果、『三山老人語録』『握蘭集』

『漢南真稿』の三書はどの図書館にも保存されていないことがわかった。歴史の古い各図書館に保存されていないということは、明治、大正時代の鷗外でさえ実際に手にとつてみる事ができなかったという事情を示しているのではなからうか。また、『中国歴代図書辞典』には「唐書芸文志」に「温庭筠握蘭集三卷、又金銈集十卷、詩集五卷、漢南真稿十卷」とあるものの、「宋史芸文志」には「温庭筠漢南真稿十卷、又集十四卷、握蘭集三卷、記室備要三卷、詩集五卷」とあり「元史新編芸文志」には温飛卿の著書名はみられない。このことから、中国本土でさえ温飛卿の三部の詩集は広く伝えられてはいなかったことがわかる。そのような書名を参照文献として挙げたのは『温飛卿詩集箋注』からの孫引であつたことを示す何よりの証拠と言えないだろうか。温飛卿関係の史料については以上の推論ができるが、魚玄機関係の参照文献についても、確かな証拠はないものの、温飛卿関係のものと同様「付録魚玄機事略」のついた『唐女郎魚玄機詩』一冊に拠つた可能性が大であるといえよう。それでは、この二十四部におよぶ参照文献の意味するところは何であろうか。これらすべての漢籍を調べあげたとみせかける鷗外の衛学的な気持からか、反対に拔萃であろうと利用したからには参照文献とすべきだとする学者としての良識からか、それともモデルとしたらいてうへの気遣いで

それをカムフラージュするためからか。そのいずれかは断じがたいが、この二十四部におよぶ参照文献の明示が『魚玄機』に歴史小説としての重みを加えていることは事実であろう。鷗外も、魚玄機の緑翹殺害事件という「実ニ芝居ニデモアリサウナ珍事」に単に歴史的真實性をもたせることしか意図していなかったのかもしれない。

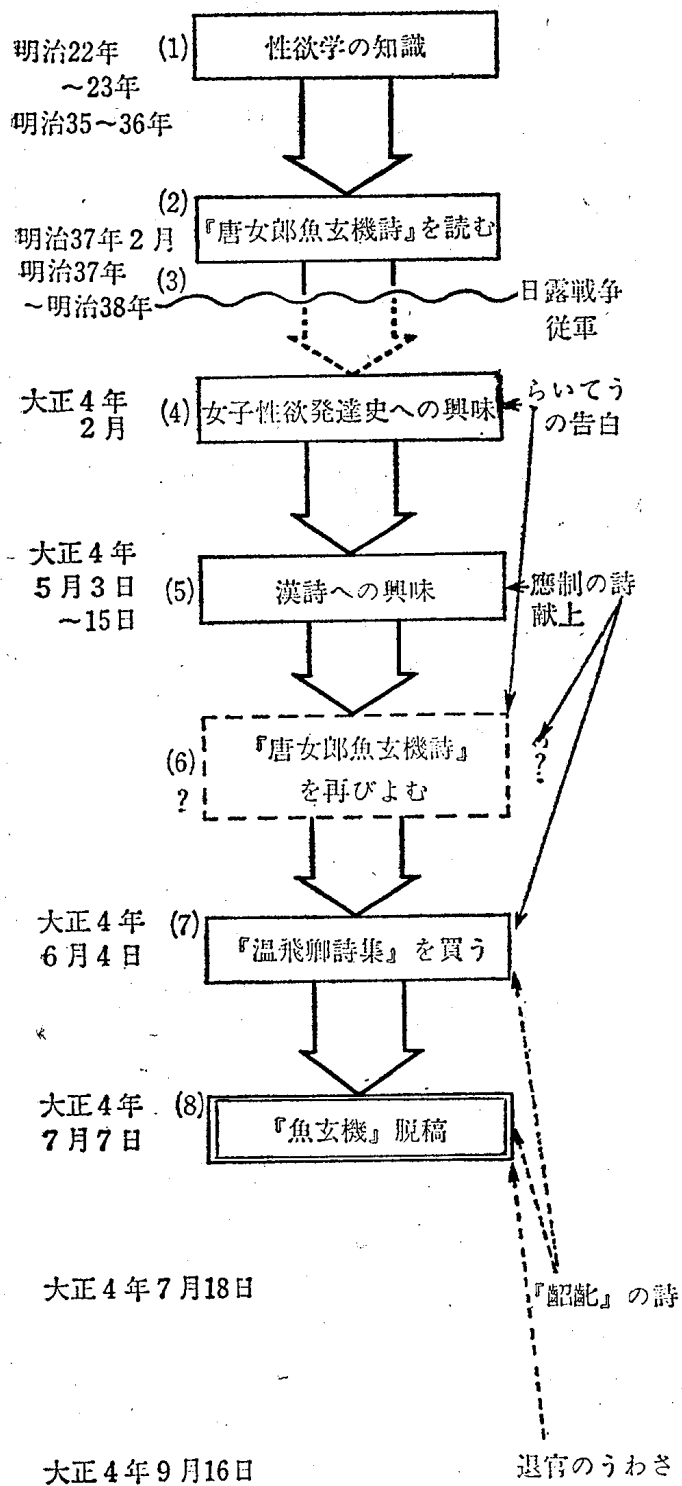
次に、『魚玄機』の史料の消化ぐあいを見てみよう。魚玄機、温飛卿についてそれぞれまとめた史料との比較表で明らかのように、魚玄機については創作が多く、温飛卿については史料そのままといい二つの傾向がみられたが、これを総合すると史料の消化方法は四つに分類される。



史料の形象化には、以上のような方法がみられるものの、温飛卿には創作の手が全く加わらず魚玄機にのみ加わったことは、『魚玄機』の史料消化において注目すべきことであろう。また、このことは『魚玄機』のテーマにもかかわる重要な特徴といえよう。

2 『魚玄機』成立過程とテーマ

最後に、『魚玄機』の成立過程とテーマについて検討してみよう。



う。史料と『魚玄機』の比較検討の結果から、これまでに魚玄機とらいてう、温飛卿と鷗外という二つの関係を推察してきたが、この推論をもとにすると、次のような作品過程が考えられる。

(1) 明治二十二年二十三年 鷗外は衛生学、性科学の記事を雑誌に発表。性科学の知識において当時の日本で極めて高い水準にあった。

(2) 明治三十七年二月 佐佐木信綱から『唐女郎魚玄機詩』を入手。「芝居ニデモアリサウナ珍事」として関心をもつ。

(3) 明治三十七年、
同三十八年 日露戦争に従軍。魚玄機への関心とされる。

(4) 大正四年二月 『青鞨』紙上で、らいてうの「小倉清三郎氏に―『性的生活と婦人問題』を読んで」を読み、女子が性に目覚める過程に関心をもつ。

(5) 大正四年五月
三日、十五日 「応制の詩」献上の勅命を受け、とだえていた漢詩への興味が高まる。

(6) ? 漢詩への関心から『唐女郎魚玄機詩』を読み、らいてうの告白と結びつけると同時に温飛卿に関心をもつ。

(7) 大正四年六月四日 『温飛卿詩集』を買い、温飛卿に同情と共感を感じる。

(8) 大正四年七月七日 『魚玄機』脱稿。

(註 温飛卿への関心はいっおこったのか不明であるが、温と玄機を結びつけるものは玄機の史料にしかないところから『唐女郎魚玄機詩』を再び読んだ後に温への関心を抱いたと仮定した。)

以上のように『魚玄機』の成立過程を想定したが、もしこれを正しいものとするならば、『魚玄機』は、魚玄機にことよせた女性版『キタ・セクスアリス』、プラス温飛卿にことよせた鷗外の官情への不満の吐露という二つのテーマから成り立っていると言えよう。むろん史料の検討から割り出した推論によつて説明してきた『魚玄機』のテーマ理解には多少の無理があるかもしれない。しかし、鷗外が、新しい女、らいてうに目をむけ、歴史上の人物

をかりて女性版『キタ・セクスアリス』をもくろみ、しかも、退官前の複雑な気持の中から温飛卿という不遇の詩人に共感をよせた、という可能性は決して低いものではないと思われる。

今まで鷗外研究の対象としてほとんど注目されることのなかった『魚玄機』も、このように、人間鷗外とその歴史小説の解明において決して見過ごされてはならない作品であるといえよう。

付記 史料については、『続談助』は東洋文庫、『唐女郎魚玄機詩』『温飛卿詩集箋注』は鷗外文庫、その他の十八種は内閣文庫の蔵書を利用した。

(昭四八 日文卒)